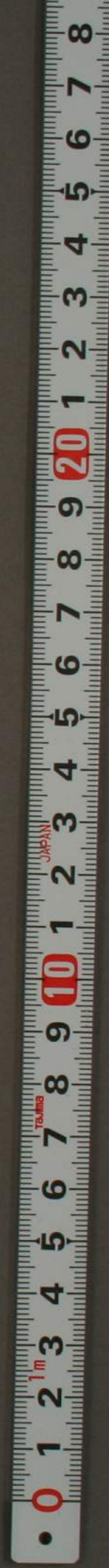


和漢文操

銘類
傳類
吊条類

七

81
76



和以之...

...

塔銘

蓮...



有... 八月... 有... 觀... 尺... 寸... 兩... 輪... 山...

...

和漢文探卷之七
81
7



和漢文探卷之七

○銘類

鑑塔銘

並序

蓮二房



今歲享保下雨，秋八月十六日，有當先師
亡名之七回忌，則構一間四面之墓，取而
祠堂曰文星觀，居謚名曰梅老佛，歷然則
此塔之厚鑑也。圓直一尺二寸，而面在者
殿，今之謚名，背亦有合誌，年與月日矣。其
地者，今造立美濃國山縣郡之輪山之西。

大系卷之二

北黃山禪刹之塔頭梅泉庵之西園止乎
山者徒本備水竹之奇麗而先師一家之
菩提寺也抑謂文星意者出一行禪師之
一掌經而天文星者我師之主命也其頌
曰余遇天文秀氣清滯腹文章錦繡成云
然則我師之所遊文章天生文質而非吾
輩之可談實夫觸月花之折也則安摩與
神助之操要耶祖翁嘗稱我師之文學而
以彼之文章換我之俳諧則我者可遊文
章彼者可狂俳諧與者人麼有年榮之遊

品而文章者愚老之起卧俳諧者交人之
好惡則也初社見雞波之遺快了則文章
及故者在武陵而乍預枚風之文庫可任
我師之點換與手誠思此等之遺命則今
將讚文星之二字而可不題祠堂之面門
矣耶梅菴佛之三字者作師之標號不舉
在世之名數者所憚自稱之橫柄也耶斯
而鑑之厚用也人之視之愛之入之視之
憎之憎愛者唯在人之一好醜而鑑者從本
無心也則安建置一面之鑑塔而世々將

字我師之本情與也率哉錄先師之行狀
則入學者延寶之始也采其頌詠山寺之
紅葉連哉入仔呂波之詞而為響響勃之
尺名者年漸十一之秋也來多義俳諧之
臘則在謂之十六年矣斯而不撓世上之
是非莫分東華西華之名而東者無松鳩
之侍人麼西者踞坑築之不知浦山而潛
身於憎愛之隅了則置心於虛實之歧矣
季葛松原年有繕俳諧之皮毛居續五論
亦有調俳諧之姿情歷其外夜話云日記

云十論者增而白馬之眼藏而論俳諧
與俳諧之有差別古今事了則從矣儒仙
老莊之廉學者各詩歌連俳之備出習當
時務成若子執子之宗近而不令其齒看
其衣假令可為我行之荷擔人麼古老者
銜口新輩者歎耳而憎愛者例之無在時
帛矣尤有者不察建立之意地相手鑑之
影坊而認虛認實則也爾有則從彼忘此
從此忘彼也則千歲之先者可拜彼人千
歲之後者可拜此塔矣夫

書ナリ始ニ余官國ヲ出シ次ニ十二星頌アリテ文星
ハ才六ノ至命ナリ題ニ八仙道天文曰星トアリ其頌曰
余遇天文秀氣清聰明知自惠意惺々田史入
秀身清吉滿腹文章錦編成

其謀星至命聰明佐利字識遇人作事和美
君逢貴福藝相助者定為教魚頭独白
虎榜登名金階玉階之人也若得權及者
文武多才乃為上命若遇破厄孤驛及
重者乃多學少成不為書筆文墨之輩必
為下重遊湖海之人乃手藝術士之下命也
掇スニ貴福以下孤驛ニテ九字ハ仙道天貴星ト云イ鬼
道天馭星ト云ル十二星ノ各自ナリ去ル年月日時ヲ以テ

掌中圖ヲ美ヘ回ニ或ハ天貴ノ吉星ニ遇ヒ或ハ天馭凶星
ニ遇フ回ヲ美ルニ師傳アリ細奉スニ暇アラス ●長恨歌

天生麗質難自棄 ●謝吳運傳膏於永嘉西

堂田思詩竟日不就志悲見惠連即得池塘春

草生大以存工常云世語有神即非吾語云

今論為輯抄難波ノ遺狀七通アリ中ニ擲折一牧ハ遺物
實書ナリ才五ノ書一文章多々如等云ハ枚向スルニ

文章のく子福の支考をる既換し △文星觀之文字
ハ擲額ニテ燒桐ニ紺青ヲ入テハ望鑑屠ノ象字ナリ

筆者ハ賀金城ニ聞フル富田太椿ナリ本ヨリ歌子各言向
シテ古家新家ニ委ニク或ハ八分韻府ヲ著セリ

△梅公佛ノ文字ハ草躰ナリ和泉ノ青石ニ白何石ヲ以テ

其臺トスニ重シテ互尺餘アリ筆者ハ洛ノ井出一適ナリ
 此老ハ井出京ノ嫡統ニテ越ノ福居ニ産シテ洛ノ涼風坊ニ
 住メリト卓犖不羈ノ凡人ナリトフ ● 仔呂波ノ歌入ト獅子
 庵遺稿ノ夜話 亦むくくおのほけいももはね葉
 とつくとく色とまふもあちりあちりおまふとくく
 師坊やうく毛服山の音もあまきく秋風と所がより
 さうと我師父の古風とすかおれしかくくさトちつと
 子血母をさういもけあふれふのあまきくくさくさ知の
 女ももあまきくさくさあちりあちりおまふとくく
 遺訓ニ我滅後北年ニシテ俳諧ノ上手モ出キ古冬ナリ
 宣王ノ其訓ノ評詞ナリ△滕王閣記ニ勃と尺微命ト友
 書生云と尺微命トハ童部北月ヲ云ヘリ 今本朝文鑑

十名説 東ノあまきくさくさと東華坊といひあまきくさくさ
 西華坊といふ華子ん采也也トアリ其始ハ東老集
 ト云ク西老集ホト云ル東西ニ佳ホノ各ニ據リトフ △侍人モ
 不知モ古歌ノ裁入ナカラフ不知火トハ筑紫ノ松詞ナリ
 △昔自松原ハ奥州行脚ノ俳諧ニテ△續五論ハ筑紫行脚
 ノ遺訓ナリ續字ハ葛松原ニ續リトフ△東西夜話ト
 云ク自和日記ト云ル何レモ俳諧ノ附方ナリ △俳諧十論
 ハ芭蕉家ノ大綱ニシテ白馬ノ要文ヲ採タレハ佛家ノ
 正法眼蔵ト云ク涅槃妙心ト云キナリ△鑑及影坊ハ一篇
 ノ結語ナリ△按スニ十論以下ヨリ 認虚認實ニテ十論
 一部ノ註釈ナカラ儒仙詩歌ノ偉表トナリテ影坊ノ
 二字ヲ以テ例ノ言語ヲ敵シタル諷刺ハ更ニ言ハス

の二歳より三足の猿と擲く字一視する聴する
言するの爲ちりより此れの中にも此の如く福
の所あれども魯此廟守此口と仰ぐまこと其國の
そよむまことやうい言とほくまむの徳今これより
おほくはつとて近くとも南に懸とつた物と
物と下居とす一秋の風とて我家の爲の歳
あるとや平ひとて二歳とさあし月と月と
あまの時の歳とて海をたぐ色とて我とて老い
ぬやとあまのむすかんのものとりて死言のまはく
せとくこけして老めたるまも例のあはしとくは

後中一他借はてして他人のよりあしとささあむ
さしとあらしを言法めあらしはうも自己せ不
とかつりふれはる程をかつて此處らとて座を
の願ふもこととけして老の歳とてあむ

銘四

願ふはけを月とて自らあはれし
不食やして自慢の所はあれつあむ此
各々やうあむとてささくささや
願ふはけとて虚の事あれ打者たつ

一、空とも認され鮫とわさゆり慮るも浮
とれ慮るやとては干野の用あるや
孰しく許由の鳴と増おとも空也とて
おともれ韓愈のな達とおらぬと
おゆとては物とすまふれとまらぬ
秋の毛しもるの非鳴ときもつりき
又石のふいふんもみり子はあつらん
殿へまらり子能の非認とまらぬ

○註曰△視聽言動の四箴ハ前ニ出タリ△宗詰觀周
入太祖后稷之廟有金人秉爇緘其口銘曰古之

慎言人也中畧口是禍之口也△角口聒ハ前ニ出タリ

△論語異端註當如淫声美色以遠之云巧言ノニ
字モ論語ノ詞ナリ△銘解△論語吾豈匏瓜也哉

吾能繫而不食云△許由カ瓢ハ隱逸傳ニアリ細奉

ニ及ハス△空也ノ鉢扣ハ高僧傳ニ在リ細奉ニ及ハス△韓文

送孟東野序凡物不得其平則鳴以鳥鳴春以雷

鳴以虫鳴秋以樹葉落鳴以風鳴以水鳴以石鳴以

韓子カ神鳴ハ憎愛ノ結ヒテ此等ヲ文中ノ文ナカフ深ニハ

筆端鼓舞ト云ク倭ハ筆石ノ絶妙ト稱ス△在子魏王

貽我大瓢之種我樹之成而實五石△降詔指及以

願ハまらりとてと識伊達ちり子者の池抄よまらり様也
評云は後と克己のそとを志るなり一室の稱なり

猪ノ祝願言のこと起テ新ノ言のつと猪了りて
神ノ志をたの嗜とさる一ノ作者を越の福并に
了能活一坪の存ありて天并より有底高
と標より一昨裏伯免ハ忘年のおありと也

俎板銘

岸昨裏

日新之日古
以豆象一年性
之日節獻鶴
惠王何遠厨
子攘羊隱父

朔云々晦云々
横準四時曠
七種粥雜芹
孔子志学軍
臣亨兒郷良君

柳鱧身款滑
鎌矛頻令郷音
天牟畏河豚
争忘甚弱鏞
寧識無絃

解鮓鬚及斷
納豆坐所聞
我生宜海雲
縦嗅雌雄董
所見而且有文

註曰書經湯之盤銘曰日新日新日新
日用六藝暗云云トテ新古ノ事カテ漆タリ論語云
吉相歸羊八俎板銘ノ寄事ニテ及ニ晦朔ノ佳節ヨリ年月時
ノ日用ヲ見ルルニ之日節ニ鶴ノ居下ノ古ニ奉膳式ノ沙汰
ニヤ壽又ニ七種式ハ奉ニ及ス孟子惠王章子慮有
肥肉云宣王章君子遠志厨云按スニ此高ハ在子ニモ

梁惠王ハ危下ノ所居アハ宣王ノ如ク慮屬ハ去テスト同書
 ニ同語ヲ翻轉セシト等ヲ奪胎ノ絶妙ト稱スシト論語
 姐豆之古又則嘗^キ聞^キ之矣^キ軍旅之古又^キ事^キ之^キ也
 ▲論語父攘羊^キ而子證^キ之子曰父為^キ子隱^キ子為^キ父
 隱^キ直^キ在^キ其中^キ矣^キ史記桓公曰易牙烹^キ了我子^キ以^キ快^キ
 寡人^キ尚可^キ疑^キ邪^キ抑^キスニ此對ハ羊ニ姐豆ノ孝行ヲ合
 兒ニ^キ鄉^キ長^キ應^キノ忠^キ節^キヲ顯^キス君臣父子ノ字對ハ更ニレテ
 又ニ^キ意^キ對^キノ絶妙ト稱スレ^キ ▲論語畏^キ天^キ命^キ畏^キ大人^キ
 云^キ抑^キスニ此對ハ公私ニ用^キラ云^キカラ何豚ト云^キ海^キ云^キト
 云^キ此物^キ名^キノ儻^キヲ見^キルニ^キ ▲白馬談笑訓^キ色^キと好^キむ^キ者
 温^キ飽^キの^キこ^キく^キと^キ一^キさ^キる^キま^キ切^キの^キこ^キく^キと^キ一^キも^キと^キ豆^キ腐^キる
 へ和^キす^キの^キが^キあ^キり^キく^キ甚^キ弱^キと^キ此^キ儻^キの^キさ^キい^キあり^キと^キ也

△論語山梁雌雉時哉^キ子路共^キ之^キ之^キ嗅^キ而作^キ抑^キスニ
 此一對ハ雌雉ト^キ雉子^キノ雌^キ字^キラ云^キト甚^キ弱^キノ連綿^キニ對^キセシ
 トテ論語ニ嗅^キ字^キヲ假^キナカラ雌雉ト一名ニ訓^キスル^キ此等^キヲ
 摘^キ語^キノ絶妙ト稱^キスレ^キ ▲例明本傳^キ常^キ撫^キ無^キ絃^キ琴^キ
 曰^キ但^キ識^キ琴^キ中^キ趣^キ何^キカ^キセ^キ上^キ聲^キ云^キ△論語質^キ勝^キ文^キ
 則^キ野^キ文^キ勝^キ質^キ則^キ史^キ文^キ所^キ質^キ極^キ而^キ然後^キ君^キ子^キ也
 ○評^キ云^キ此^キ語^キと^キ句^キ十^キ約^キ一^キテ^キ文^キ欣^キ顔^キの^キせ^キと^キと
 め^キテ^キ子^キも^キ私^キの^キ約^キ礎^キと^キめ^キら^キひ^キと^キを^キ論^キテ^キ後^キ文^キ
 テ^キと^キ論^キテ^キ後^キ文^キは^キ信^キ者^キあり^キと^キね^キて^キし^キ能^キ行^キの^キ平^キ尾^キ
 ち^キり^キと^キる^キ一^キを^キは^キら^キく^キ一^キを^キ論^キの^キ稱^キより^キ不^キと^キ可^キ法^キ
 姐^キ叔^キの^キ容^キと^キと^キを^キ論^キテ^キ常^キと^キを^キ論^キテ^キ此^キ等^キと^キを^キ論^キテ^キ
 より^キ論^キテ^キ首^キ尾^キの^キさ^キい^キと^キを^キ論^キテ^キ此^キ等^キと^キを^キ論^キテ

をねやうと譯し文所又概くしてあるはこれ其の
實となくあしありはと能治の慮とあそひて是を
我々の文者ととつてしむ

本箱銘 並序

菅師冬

久々此天地と文庫とて中に得此の書と
かくれし物とあつては世にわづらふ事なきに
あつてもて之を一一掃きしより聖人といふもの
是人とてしむるにやとていふと六藝の名に
あつてはもては儒といひ併といひ詞のむしものあり

下千校万葉の抄書とらあかりきりあつたあつたの
おもしろき事楳の子なるをそとゆめ後とつて
おと書雪のゆめありとて下校とてしむる事
るやあつたし達し大御と書し御書とてしむ
鼠と御書の秘とむつとてしむる事御一書とてしむ
わづらひしとて御書の秘とあつたし我を降を
しははしあつて腹は堪へし物とてしむる事御書
はこれとてしむる事とあつたし御一書とてしむ
御書とてしむる事とあつたし御一書とてしむ
御書とてしむる事とあつたし御一書とてしむ
御書とてしむる事とあつたし御一書とてしむ

あけぬとあまともく

其銘

智を志とほり唐の如く 假名と書ふと此形より
 松のまろり流をきつりや 桐の節あそ歌やうく
 机と鉢の目とほりまると ちよ花のいろははつる
 魯般をそれ格けりとも 竹田の書はしあそ遊む
 けけらぬとささるけりとも むしれはるるくはり桂
 ○註曰△平文子_二万事帰_一云碧岩録_二万法帰_一云△雪雪
 故夏の前_二出たり△達上_二六門集_一以心傳心不立文字

▲晋書 郝隆七月七日仰庭日曝腹中書云

其銘 ▲在子_二蝶_一夏前_二出たり▲野語述説 勸学院 崔

ハ夢_二求_一野語_二ハ野語_一説_二アリ或云崔_二即僕_一籍名_二セ_一トモ

或云学院_二園中_一有_二黃_一鳥_二鳴_一呂_二澁_一非_二熊_一西_二字_一也アリ

△淮南子_二魯般_一仕_二楚_一王_二作_一雲梯_二攻_一宋_二云_一竹田ハ後朝ノ

細工人_二テ_一夏_二和_一漢_二ヲ_一對_二シ_一厚_二ナリ△後語拾_二芥_一むし

の刺_二今_一也_二葉_一印_二と_一盛_二衰_一の_二書_一化_二と_一以_二を_一不_二の_一血_二氣_一と_二を_一

○評云は_二後_一と_二隱_一見_二の_一字_二は_一あり_二く_一唐_二ノ_一あり_二矣_一と_二評_一云

も_二や_一ら_二む_一治_二ま_一る_二不_一る_二儒_一師_二を_一北_二和_一漢_二の_一書_二籍_一を_二買_一い

あ_二り_一て_二博_一學_二の_一名_二と_一を_二さ_一れ_二り_一も_二志_一を_二れ_一り_二達_一上_二と_一郝_二隆_一

と_二ハ_一字_二と_一の_二む_一ん_二の_一程_二を_一て_二用_一け_二る_一を_二け_一る_二と_一志_二を_一

へ_二ま_一り_二況_一や_二冠_一と_二劍_一との_二鏡_一線_二を_一削_二入_一笑_二中_一の_二刀_一と_二い_一

一作者と菅中より別々木牛兒と操子と尾城
の八の觀と所より書とより一箇とよりと重
名と万能磨とよりより

炭取歌銘

此後謎文ナリ評註
ニハ及ス椰子庵ニ
五寶ノ其一ナリ

花とるるらまきりまろく
空と冬つりてくは

椰子老人

鯉打銘 並序

崎一秋

かゆと打物めそおとるる。實ととわ双

とちのいさるとるれ鉄炮とちのいさかかあはし
とさちへきくちた人と殺したるささふと人
かむして防くともあはれとあもはらりて美示
長城と一雉の火油のちあらひらひあらはる人
仁の二字とやして魚とるれとも鯛とけりもると
射ととも射とちのやうとも射よへ射かして
とさちへてとも糖とけりあちりともあ
あ。政陽殿と種とわくとも授給のまは種打
とよりらへ炮烙の屍と種とわりて書く殺
はくともとらへて軍と社席と射と孔門の

教ふあきさちり一節を行はの罫打と云らして
ありし我右とおあしきやうふ罫打の
きと罫打と云ふ一王や罫と云ふ一王ふ罫
と云ふと云ふ柄と云ふと云ふ

殺すやうれ敵とゆさく
打すやうれ罫と云ふ
罫馬不にちりやし
與ぬる克己の銘あり

○註曰はれく竹と云ふと云ふはるちの實と云ふ
擲と云ふと云ふと云ふ擲と云ふは對に鉄炮と見しと云ふ

身ト實トノ字ヲ對ノ倒將ノ絶妙ト稱スレテ長城
ノ防キ史記ニ出タリ△一炬火ハ阿房宮燬ニ在リ炬字
ヲ炬トハ和訓ノ習俗ナリ△論語ニ鈞而不綱也正射
△中庸ニ慎其独也△憎蠹賊ハ故陽公ノ作ナリ爰ニ
ハ殿ノ一字ヲ稱スレ△家語ニ其征也還仲社帝之
上ニ云△與叔克己銘凡ク殿有生均氣同縣胡爲
不仁也

○ほ云此銘と履安の音用して致陽と云ふ不仁の二
字とあつた殿の一字より誤謬と云ふ其のそと地と
堪破と云ふ一と云ふは與ぬる克己銘と敵味方の用
あつた銘の所と云ふ格ハ陋室銘と云ふ作者を
尾城の史官として大崎氏の逸士ありと云ふ

○註曰竹取の雨ノ旨又ハ万葉ニ長歌アリ奉ルニ及ハスはれく
 多ク如歌ウカクありてくそなれどもあり △櫻集本
 わくまをりゆりゆりも坊中なるあつたけ生をト云ハ其詞
 シ互照レテ次ニ西行ヲ出スキ断續ノ多クナリ△富江見西行
 ノ夢園ハ益師ノ家ノ形容ナリ△東坡方戴^テ三^ツ葉^ト上^ニ三^ニ
 ル雪中園ハ和漢ニ多シ○たご^ニ文^ノ輝^ル地^ノ花^ノ ○宗^ノ維^ノ
 ●詩^ノ仙^ノ最^ノ語^ニハ美^ノ重^ノ吳^ノ天^ノ雪^ノ履^ノ香^ノ楚^ノ地^ノ花^ノ ○宗^ノ維^ノ
 各^ノ段^ノ句^ノ世^ノノ^ノあ^ノる^ノも^ノさ^ノに^ノ何^ノあ^ノの^ノや^ノら^ノ哉^ノ
 ○ほ^ノ云^ノけ^ノ終^ノを^ノ後^ノ集^ノよ^ノめ^ノて^ノう^ノが^ノこ^ノの^ノま^ノら^ノあ^ノり
 さ^ノら^ノを^ノえ^ノ祿^ノ甲^ノ成^ノの^ノま^ノ伊^ノ笑^ノの^ノ西^ノ林^ノ廉^ノ庵^ノよ^ノめ^ノて^ノ
 又^ノ福^ノ十^ノ二^ノ編^ノの^ノ再^ノ授^ノあ^ノる^ノう^ノけ^ノ後^ノも^ノの^ノ一^ノ編^ノを^ノ
 以^ノれ^ノ進^ノ福^ノの^ノ後^ノ語^ノよ^ノめ^ノ今^ノや^ノあ^ノる^ノの^ノ進^ノ文^ノと^ノ

傍^ノ周^ノの^ノ藤^ノ柿^ノと^ノ論^ノも^ノ風^ノ園^ノの^ノ派^ノ船^ノ集^ノの^ノ
 ハ^ノ藤^ノ柿^ノ舎^ノよ^ノめ^ノて^ノ人^ノの^ノ信^ノを^ノ一^ノつ^ノは^ノさ^ノる^ノ
 今^ノも^ノ古文^ノの^ノま^ノら^ノあ^ノん^ノま^ノら^ノ自^ノ字^ノの^ノ遺^ノ文^ノ
 あり^ノも^ノ知^ノし^ノ知^ノま^ノじ^ノあ^ノ時^ノの^ノ信^ノ路^ノの^ノ指^ノま^ノた^ノ
 七^ノあ^ノら^ノん^ノ威^ノ後^ノの^ノ選^ノ論^ノを^ノい^ノた^ノま^ノら^ノて^ノ
 け^ノの^ノま^ノら^ノあ^ノま^ノら^ノ初^ノ集^ノの^ノ在^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノ
 何^ノれ^ノの^ノま^ノら^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノ
 見^ノせ^ノま^ノら^ノの^ノま^ノら^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノ
 本^ノ集^ノを^ノ此^ノ飛^ノ見^ノに^ノけ^ノは^ノ湖^ノ東^ノの^ノ孟^ノ耶^ノ觀^ノ一^ノ編^ノを^ノ
 差^ノ塚^ノの^ノ名^ノよ^ノめ^ノて^ノ洛^ノの^ノ而^ノま^ノら^ノ信^ノ路^ノの^ノま^ノら^ノ
 或^ノは^ノ武^ノ江^ノの^ノ名^ノよ^ノめ^ノて^ノ此^ノ名^ノの^ノ此^ノ集^ノと^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノ
 と^ノ例^ノの^ノ派^ノ船^ノ集^ノと^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノあ^ノり^ノ

羽の香も一信するは嵐七の舞物と云ふはさうりのおま
と加しられおまの徳とあれはれり遷論の用と
ちれり

髮鏡銘

百何仰

原夫世界之始者無鍛冶鑄物師之業
爲了共天圓地方也了万物各莫不具質
德事鼻矣中亦麼謂鏡物者傳儒仲神之
魂而遠照國家之政兮近顯君父之道兮
况向明暮之鏡而男者持髮之不紊心則
女麼嗜同許之有塩敷様而霽死起死松

之二葉成月出度御代之媒了矣斯者和
五倫之中了則實麼謂鏡之天下一者矣
抑從正月之重鏡五九添月日之光了則
不失四季折々之望花亦者水之成鏡了
身亦者翟之采敷了孰若不爲凡雅之便
飲者但角儒行之孔夫子者七十而從心
所歎共建置明德之鏡而若繁之仔達者
不爲麼樂而不淫了哀而不傷了程子麼
所謂虛矣不昧則可謂孔子無能諸之虛
實矣耶又佛家之教也高懸置淨玻

瑤之鏡而令眼。地獄極繁了則八万大衆
摩五百羅漢。摩入一寸四方之箱。被照
智慧之鏡而唯心淨土。已心淨陀。去
此不遠與所矧夫神國之天照皇者生給
白銅之鏡則被鳥法。岩戸之神樂而移給
于心。心之鏡。居矣。左有者万之神遊。連有
面。白。俳優之歌。給則歌人連奇之家者不
知。俳諧亦者供神酒。而不崇。鏡之御影。栗
耶。左有入道者懷入一寸之鬚鏡。而密
者所見其鏡。了。年者所美。此指。了。額。被。之

漣々波也。鏡之山。麼。近。了。則。耻。老。面。森。之
名。而。臨。溪。而。鬚。麼。不。接。增。而。可。眼。儒。仙。之
真。義。探。神。道。之。秘。密。耶。虫。文。了。雪。且。了。仰
花。味。月。而。及。鼻。毛。之。用。心。而。已。也。

○註曰。老子經。天地之間。其猶橐籥乎。虛而不屈。動
而愈出。云。橐籥。八吹。革。ナリ。△天地方圓。八前。出。ナリ
△天下。一作。上。鏡。裏。ノ。銘。了。了。其。銘。ノ。古。凡。了。移。了。若。父
以下。ノ。二。章。三。五。倫。ノ。裁。断。了。見。了。ナリ。○在。と。集。音。と
而。了。の。後。了。る。の。水。を。ち。り。か。ら。る。や。り。の。り。こ。し。に
擲。了。に。五。字。八。天。和。三。毛。直。名。ノ。用。了。り。と。去。に。彼。名。水。之。鏡
了。續。了。故。了。水。之。鏡。了。了。花。之。鏡。了。非。了。直。了。名。了。成。了。字。了

以テ水ト鏡ヲ隔ル故ニ水ヲ以テ花之鏡ト成セリ去ル真々ノ
 伴勢物語人馬被知ノ歌ノ千本波言不不ト畢下
 ノ差別アリ但シ厚ト矣トハ和詞ニ動アリ山尊ノ我影ヲ
 見テ其鏡ニ舞フ是ハ俗々多ク子コ出タリ細奉ニ用
 ナシテ平竟ハ花鳥ニ寄セテ鏡ノ夙雅ヲ云々ナリ△論語七十
 而從心所欲不踰矩△大學道在明明徳云△論語
 緇裳紅紫不以爲褻服註紅紫近於婦人女子之
 服也△論語罔睢樂而不淫哀而不傷云詩經罔睢
 ハ夫婦ノ中好キ喻トク△大學明德註程子曰虛灵不昧
 以是衆理而應之者也按之此結語ハ程子実字
 ラ語ントテ強テ我亦水ノ虚字ヲ奉テ明德ノ主ヲ證又
 ト成セル例ニ能語ノ意地ト知レシ △淨玻璃鏡ハ佛經ニ

出テ之世通達ノ喻ナリト云按之此起語ハ眼拂ノ面影
 ヲリノ相ノ一字ヲ形容セシヤ法ニ隱見ノ絶妙ト稱スレシ
 △一寸四カト云ノ方ナリ唯心モ已心モ用ト知レシ按之此ニ
 句ニ大和ノ真々名文ニ句讀ノ設アリ是ヲ漢文ノ字配リニ
 云ハ被照ノ二字ヲ以テ爲入ノ上置キテ和訓ハ諸路ノ
 直アリテ上讀ハ十字ト成リ下句ハ五字ト成ル故ニ上ヲハ
 字ト成シ下ヲ七字ト成シテ句讀ノ長短ヲ配キテ等ハ
 大和ノ新制表ニテ例ニ倭文ノ固曲ハ返ハ十字ナ故ニ和漢ニ
 音訓ノ差別アリトノ前撰ノ百花賦ニ木瓜花ニ配アリ
 比丘尼ノ句讀ニ互見スレシ△唯心モ已心モ淨土經ノ語ナリ前
 アリ△去ル不遠モ前ニ出タリ △日本紀乃以衣手持
 白銅鏡則有化出之神是謂大日靈尊云大日靈ハ

大日靈尊

大日靈尊

天照皇ナリトフ▲岩戸ノ夏モハ照鏡モ前ニ出タリ▲西國部
 廣成古語拾遺ニ八十万神於石室岩戸前奉庭燎
 巧作佛優相與歌舞云非優ニ子ハ漢書ニ出
 テ滑稽傳ノ優游トフ▲鏡ノ御影ハ鏡堂ニ在リ天神ノ
 自益ニシテ神酒ヲ供ハ色ニ出玉トフ▲榊ニ此結語ハ
 岩戸ノ鏡ノ影迎テ御影ニ神酒ヲ結スハ菅神ハ
 本言凡雅ノ祖ニシテ神妻ノ和光ヲ傳テクヤ悉ハ此等
 ノ文法ヲ双箇ノ絶妙凡互照ノ好辭凡稱スキナリ
 ▲庄礼ノまよは花きとの時傳ある時法とて神のまよの
 心あきとをまよとてし後、神詞、但書を後くるやゆ
 奇とあきとてあるしなり○羈旅ニ後らひまよとて
 及けし年一ちり力を老やまあるし○今皇集かたりり

後のおとろくろにあらるのまよあけまよとて
 ノ二句ハ四季ノ用ナラ孫康車胤カ字文ニ寄セテ儒佛
 神ノ字道ヲ粉成トス例ニ佛文ノ意地ヲ知テ鬼毛ノ
 ニ字ニ着自破スレ

○佛云は佛を塵言おまろくろ大和ノ真名此又鏡とて
 心むらうと後ノ二字とてゆむむと此書用とてけける
 或と和訓の字とてりり内漢の長短とてまよとて
 と真名名の詠用とてまよとてやちり一や兩の字とて玉鏡
 の神と物をわし鏡の心法とてまよとて佛佛の二後此
 珠まよとてまよとて佛の滑利とて後中解法
 一のまよ作を例の後其仲とて後とて入道
 の自結ちりり

○傳類

竹夫人傳

良壺峰

むしぬは池の浮遊しきもせむるのひらり始り
 淨帳のしらひもあつて深き谷のふかき
 回糸の戻りもあつてしほのちのちのち
 時のふかき行りしれりし白の絹とを
 美のふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを

よあひ鏡の言れりもあひひらりし
 にあつてもあつてもあつてもあつても
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを
 ちかへるふかき行りしれりし白の絹とを

とわくわくありきりあり万葉歌の前は河津あり。△木六
 竹八上里譲り木六六月はけり竹八月はけり夏下ろす夏三層
 人富各ナリ。△渾中玉慶美を二駭黒大将ノ詠諧アリ
 肉太下今ノ形容ナリ。△夏客堂ハ漢武故直又ニアリ
 前ニ出タリ。○後撰集秋風の吹よはけりしとわく
 多女歌のそよよとまをくし。●斑女扇怨歌行
 ハ之前ニ出タリ。△長安ハ漢土ノ都ニテ帝都ニ和漢ノ帝
 ラ對セリ。△山谷ハ黄魯直ヲ稱号ナリ石牛洞ハ魯直カ
 別墅トシ。●山谷詩集趙子亮示行夫人詩蓋涼夜後行
 器甜心唇休膝似非夫人之職予及名曰青奴並
 以詩取之禮李四絃以拂席昭華之雲月侵床
 我無紅袖堪娛夜政雲青奴一味涼。△黃魯直ト云フ

物堂和尚寺ニテ山谷居士ヲ交禪ノ師ナリトシ
 ○深云此作を令く寓言をく如く後より後より行まん
 の事本を後より今ノ電厚の進退とわくし。○削の
 詠諫とほまき。一はく一筆の秘もくおはまき。○客
 の記とつひくをりをよ敷のてまとい。後より
 長安の市とつひくせり。おはまき。○節のニ子とす
 ちうれ。一筆の二段。一はく一を髪つとの肉を
 つひか。こゝろ赤髪頂の黒痛とす。○對子對の例の
 いふ。又對の字此一格。一はく一を隔對の絶妙と
 稱す。一はく作を深山中。一はく賀の金城はまおし
 ちう。越の石動。一はく嶺官。一はく良を姓。一はく壺降
 とあまを。一はく書。一はく博覽の凡士あり。一はく我

瓦器傳

河何竜

此も瓦器といふ物と混へ純への倫なりて
 その容もろくその性ありをれと天帝此を以
 して非神教教意を常の宮を此の物と
 なきりまかりをれ人の代此酒をたありて暖
 酒のまといへ何部常清のふりて此
 といはれはる年族ありま
 ちやまると我々の重寶記ふと器とかりけ
 訓とるるを陶物^土の地をちりてれい和訓を

瓦器^{カハラケ}の二字を用いて音訓の通語なる一と云子保
 年申しは傳をわくまらぬ漢や岩戸の常備
 二瓶のひつりと後よりつゆは所のめをけし物
 ちやまると和えのれもいふはるむ此や教の
 ちやまると燃灯師のほりてり負す此一灯と
 ちやまると十二灯といひ万灯といふはれけ物
 ちやまるとありちむはる物者の遠業へはるまね
 の姉や母と移いよりちむむ二人の暗るるを
 ちやまるとありてちむむの業をたはるるを
 一燈のほりまねはるる年の力をわくまらぬ

とさあふのふらふらとさあふのふらふらと中世のふらふら
はたして境界さうに庭とあはれさうさうあはれさうさう
時をほらさうさうはくれあはれさうさうあはれさうさう
許由の水飲とあはれさうさうの本の枝とあはれさうさう
かかるとあはれさうさうはくれさうさうあはれさうさう
例の斗持とあはれさうさうさうさうさうさうさうさうさう
のさうり。吉原の浦北さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
てさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あはれさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あはれさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

○註曰△音語ハハ。千ツノ通ヨリ誤文ノ各ナリ 砂鉢ト伝
ニ線ト云イ 蟬ト云イ 鉄ト云フ 類ハ音即 訓ニシテハ美
中ノ音語ナリ 都久念トハ万葉假名ニシテ 都久ト等ト
ノ两用アリ 大和詞ノ後助ニ見ルヘシ 撰集抄 抄 抄 抄
夏アリ前ニ出タリ △論語ニ十ヲ而自立云云 ●古今旋記
夕息歌アリ前ニ出タリ △許由カ靴ハ前ニ在リ 及ニハ
此れク 竹の詞ヲ採リ △木子カ滝見 園ハ多クシ 花流
直下ノ詩ニ據リトソ ●飲中八仙詩ニ李白一斗詩而篇
云 中樽トハ世意ヲ摘メリ ●公子行詩ニ借向酒家何処
在 牧童遥指杏花村 △神仙傳ニ金童玉瓶ニ云

○海は傳を安記して論語の自立の二子として
の二子と親練きりたるの業然の音語より心
此各よりひるをきりて例のあらうく例のさひくこれに
業人と突殺とてふ一はめりも業井年うて師名
と様うとふも君の没後、存りて濃の岩崎
と隠遁さうとせ

讀隱逸傳

佐其玉

むし^{クルス}物極の奥に奥にむすおのひはと
はきり新炊、[△]眩とさけり人とはむしは隠遁と
さうと大きらりあやまりせきうてくこの世に人

ふと未漢の比より有あれく九尺二寸とせきか
はより孫のむしりく耕とてさうとつうとつうと
合系此うはまらに婦まのさうの蛇と打神り
一念奔起のまはるをあらうを漢と世を程と
隠遁とあらうをあらうを世に推しれり天竺の
△[△]屋の捕子のまのりもいやあり頼くとさく市
し本風とてつて言供ら月の妻とてさくあ月
のゆめをれお達とせられあり[△]虚をれ[△]雪跡いあり
あり[△]松花をれさうとせられあり[△]まのらう
のむしあれ。秋のかつのまのありうとせれと能

の隠者も或と兼へしつゝも色紙を巻物
との栄耀と称へしある所を唯心の暖味ゆへに
かくれあるを己心の苦悶ゆへにあつて和漢
し人のきよきつゝの隠逸傳とありて全路也

○註曰はれく竹粟柄をさすところあるは
入るより作らるるありて粟柄をさす折ちりて
くはむ人あれはちりて一曲脈論語より雜飲に其
段ノ取意ナリ △庭相子公孫栖野ノ結文ナリ
いしものさる人あつてははかりもを相子と云ふ其歌
ノ裁入ナリ △俳語拾芥にいふ我も人の子と云
ふはこれと隠者のまじりて詞ハ枕夢のありて

とありしお母も一行おるりて△松花堂ハ素人繪ニ
して多ハ片成ノ墨繪ナリ○古今集秋のそとに
のそとをちるひりてとせとちりてはりし △谷森
栄耀ハ八塵生カ故夏ナリ前山ナリ△唯己心ハ觀經ノ
詞ナリ前山ナリ

○譯云はれく竹のぬれぬるのぬれぬるを
和漢の隠者のまじりてとせとちりてはりし
其勝とつるまじりてとせとちりてはりし
取挫のまじりてとせとちりてはりし
とるる古文の例もあつてはりし
て後云の廣くはりしとせとちりてはりし
みしとせとちりてはりしとせとちりてはりし

人も兼る所のあつてあつていふにほのちのち
 といふもかゝるものありとふれとふし
 ○註曰●三賦詩奉帝平明金殿開云此詩は宮女奉
 公ノ様ナリ帝ト常トハ通用トシ○万葉物集の物子
 のりめのむらさきとふしとふしとふしとふしとふし
 △老子経和光同塵云△源氏常本ハ才ニノ美ナリ
 歌ヲ取テ各トセリトシ△物業秘傳抄ニ櫻摘帝古キヲ
 二賢シテ痲病ノ妙トセリ△古硯銘豈非鉞者詩
 而銘者文乎○胡詠のり此詩のりやつとふし
 けりまゝのりあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 といふものありとふしとふしとふしとふしとふしとふし
 といふものありとふしとふしとふしとふしとふしとふし
 ○たし詠詠云云とふしとふしとふしとふしとふしとふし

句ハ之則ニ隱逸ノ起結ト云イ多ニ和漢ノ文法ヲ較ス
 文ル世等ヲ鎖詞ノ絶妙ト称スシ△昼諧寒山常
 ヲ携ヘ拾得ハ卷物ヲ持ル細茶スルニ及ス●寒山詩可
 寒山道而無車馬跡云△四瞻圖ハ豈于信言ニ寒山
 ト拾得トシ各テ虎モ驢ノ居ル様ナリ豊干夏前ニ此
 ○傳云此物と云云と云云と云云と云云と云云と云云
 況もるを人向の浮沈より王公后妃を交うて事
 ありぬ宮女方士もその別れありと云云と云云と云云
 一筆の結文よりして第一轉柔條の子と云云と云云
 入臆の論と説とむまひきりんと云云と云云と云云
 法よりして第一筆と云云の旨ありと云云と云云と云云

今又、指換のたふく、虚言を削りたるものにて、
 之の去年の秋ちも、老筆のふれ、虚言のふる端も
 又、筆をけし、これあやうと、けは、案れ、達、天、さり
 と、云、け、り、や、と、作、の、文、符、よ、け、敷、の、艶、曲、も、口、又、筆、あり
 へ、き、ち、此、書、と、云、さ、れ、う、た、れ、も、中、も、今、也、終、ま、り
 だ、し、も、ち、や、う、に、か、く、あ、れ、あ、れ、と、未、練、の、筆、を、の、け、艶
 へ、あ、り、て、耶、那、あ、や、と、ま、あ、り、と、本、朝、之、後
 へ、え、り、た、れ、り、の、い、は、の、筆、ま、り、あ、む、と
 と、今、の、文、抄、へ、再、撰、へ、て、新、流、へ、書、用、の、代、り、と
 あ、り、し、ら、む、と、い、は、れ、り、と、か、り、と、い、は、れ、り、と、能、治
 の、合、と、ま、り、と、削、り、し、法、の、虚、と、は、り、と、削、り、し、法、
 の、合、と、ち、り、と、削、り、し、法、の、虚、と、は、り、と、削、り、し、法、

新流をさく、のき、地、ち、り、と、ま、り、減、り、世、評、の
 右、切、ち、り、世、記、と、一、部、の、文、抄、あ、り、と、い、は、れ、り、と

雲鈴法師行状記

蓮二房

毛、傳、く、り、し、雲、嶺、法、師、を、奥、丹、南、部、の、素、直、に、
 本、店、家、の、侍、郎、と、ら、り、と、官、馬、の、塵、と、せ、と、い、ひ
 始、と、武、陵、へ、雷、根、子、丸、と、や、り、あ、り、中、比、を、湖、東、に、
 又、老、井、の、社、と、い、は、れ、り、と、傳、り、し、あ、む、と、傳、り、し、あ、む、と
 海、と、い、は、れ、り、と、色、と、い、は、れ、り、と、鼓、次、の、後、者、と、い、は、れ、り
 了、し、年、と、い、は、れ、り、と、あ、り、と、い、は、れ、り、と、飲、中、の、謫、仙

金口木舌上云鈴之鑿三木欽ノ釈又ラ假テ天下ニ俳道ヲ能
 行ク徇人ノ喻ナリ迅雷ト法師ノ杖鋒ナク云下鈴ノ響音
 ○ほ云けれんや幸此之録一トは師の遺教と云ふや
 字に丹まの妙ありし終と一トは松子庵の遺教と
 云ふにあり付の遺教は行ふし我宗のし人好此
 宗近ありて西ノ事ノ英百人と和帳よるなり一知ら
 あつまらぬ海軍と云ふり一國中國に越路の軍も故有
 の船借と云ふいあるまゝと云ふと天下にひろあはれた
 る事と云ふおれを我と云ふおれと云ふおれを故の
 行人あり我行人と云ふ一人もあはれたるは漢ノ里に
 つも存と敬叙る車北轍と云ふと行人の始と云
 へく越前ノ依巻と云ふ男と云ふ孫の雲と云ふと云

そと行人の終と云ふ命と云ふと本朝又選ト重ニ
 此師ノ列傳とあげて東蒼行人と云ふこれ傳中の
 念敷ト兼里と云ふ男ありて一衣の兼此は
 一西蒼行人と云ふ命と云ふ一衣の仲人の解と云ふ
 一も兼里と云ふ自稱の命と云ふと云ふと云ふと云ふ
 之と此徒あるも命と云ふ同徳の命と云ふと云ふと云ふ
 蓮二と云ふと云ふ命と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 と云ふと云ふと云ふ命と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 説經の内意と云ふ一と松子庵の遺教と云ふと云ふ
 云ふと云ふと云ふ命と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 終ありしと云ふ命と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 の代に終ありし此師看持の功を云ふと云ふと云ふと云ふ

到來の曉しつりて坐臥まじの自在なるはこれの
酒色にあまひあうかく能く遊とまれば
和漢の流俗よりあまう市中の大匠とあらうて
の八仙の詩よる酒中の大仙と稱とす也

茶之界万靈也

渡部狂

南無之界万靈無貴貧無賤貧有緣麼無
縁麼從儒佛老莊之聖至詩歌連俳之
亡者這旅霖蓮葉一牧而不厭獅子庵之
侘者不重于抹香之臭乎不生於宿魂之

花言一言芳談之不事欠無則厚寐乎為
起乎尽俳優而不色又探一部之虛實令
懺悔字者髣髴之所以矣懺悔者誘引減
無量罪與哉相謂俳諧之馳走者不冷素
麪之不飾團子不煎茶者入選名花輪遠
而茶漬者面々之減次才也斯言則乘佛
於之味線而為似口而為馳走共言語者
謂孔門之一藝居謂叔氏老家之口過居
花咲一體万用則實成万法一理與好此
故俳諧者令贊談笑有諫笑言有道了也

去言語之遊者認虛認實人之假令抑
下我身而直人之草履共言則為似瓦器
置錙而振舞針之和物果有者認一言
之實而不知万物之虛故也不實之實與
不虛之虛者兩為之道一致之秘法厚哉
執中俳諧師者常欲搜仙家之迂詐崩儒
行之真言譬則如為大名之仙人之不惜
孔子之不泥於如之蒼花兮毀身兮知其
日其時之變則付檀那之核嫌而欺其事
此事欲是以論語爾麼謂君子可欺居傳

語尔者謂詞之遊敵歷所詮者所謂滑稽
之贊和線五倫面通味也今夫謂懺悔之
大秘事乃有以度於文採之選場而註者
與評者之虛實也今歲用柳子虛之戶而
欲撰例之草稿月忽有二人之客而鶴髮
之雙謂真有仙居黃衣之用謂博望司歷
博望者實麼註者回而其面藤敷真有者
何樣評者類而其容危矣率厥好思儒仙
之万卷則畢跡羅窟之撰集尔麼卜罪卸
錠而阿難融入於鑰穴而以如是我聞之

四字擴文殊普賢之智慧分顯觀音勢
至之通力分其餘之天人麼毫王麼下在
涅槃像之繪其後無為逢人鼻全于然面
儒行之沙汰則遠乍刪詩正樂近至自撰
之論語而以述而不作之四字竊比於我
老彭與者曰竊分曰我分爰擇給一代之
虛實則行人違者認例之實字而為指定
高大夫共老與彭者寓二人之面影而所
謂神變權化之師尔哉儒家之七師麼秋
門之七佛麼可知有名無相之證據人也

續編卷七

五十五

物而癡叙迦孔子之文而令穿鑿證人之
名判則為似折檀林咄之中而詰言葉之
散乎以耳於聞万卷之表以心知一字之
畫了哉于時身有仙麼博豎司麼矣々々
合而不諱一部始終之骨折急度演茶漬
之一礼而博望者乘甄子之馬則鳥有者
乘茄子之牛而飛去西之太虛了矣享保
丁未秋七月盂蘭盆日狂等噓之輪川之
流效源由供養之摸樣而和兮漢兮連詩
兮誦歌兮斯者吊胸七之跡歷今將所存

續編卷七

五十五

テ家子ノ費ト云シ△山崎老人一貫抄ニ并紀ト世本トヲ引テ
左敷ハ二人ノ寓ヨセは右ナリ左子ト敷祖トノ面影ニ寓テ古賢ヲ信
スルノ證文トフ△孔子ニ七人ノ師ト云イ釈迦ニ七仏ノ授記ト云フ
ハ總テ諸經ノ取意ナリ細考ニ暇アラズ△檀林トハ輕カシク
云リ室因凡ノ誹謗ヨリ天和比ノ常談ト成リ△俳語拾芥
凡茄ヲ馬牛ト訓ス茄子キヤス瓠子トハ禪錄ノ詞續ナリ△淳化
供養ハ詭物ノ名ヲ淳化君ヲ始トシ六十余帖ノ寓ヨセは右
拳ヲ石山ノ湖水ニ供養セシ様ナリ△其詠ハ右ノ寓ヨセは右
妻ノ哀アハレナレハあくまをあり△或云お言綺語とあり
控ツハ某式部ノ後ノ世と云々ナリ然レトモあり
○漢云けふと云く詠諧多ク文操一部の趣向と云
傳書御孫の新論と云く係文漢詩の似式と云々と

新編

五十三

とのつゝ自さるち他とせしむるもの我らと違へども
はるの儒佛の信なりて一なる建まのま地ちりる甚其憂
の自讃のゆへに梅ウメのうらみなるとも言波の所用
と云らんくを文操のま當と云くゆらるればお文と
ね言と云らんく一部の跡と云をみるあり漢ノ吊祭
のま備と云れ終ま記し文の畫と云くして大和の
優情の哀愁と云く行たはる文の死活と云く
て我らも風波のま力とありてまをれらぬお文
ま例の風波のまをてま例の風波のまをて
はるて一軒万用の詞はむし一方法一理のまをて
むや南のまの始り綺語の終りてれとて漢の
能階神のまのまをて和漢文操と云く各と真名

新編

五十三

と此通用といひおろしとちも我々の平話なれい
和漢と一牧の繪圖のいづく獅子庵の文庫より
写し置て爾雅篇海のいづくとけいといふと
何呂波韻一冊といふは中の字とあけむとせ

享保十二丁 未 秋九月如意珠目

洛陽寺町押小路

橘屋治兵衛持行

書目林

- 一本朝文鑑
- 一俳諧十論
- 一和漢文操

俳書目録
假名文集 全部十卷
新古評論 三卷
假名真名文 七卷

- 一新撰大和詞
- 一十論為辨鈔
- 一和漢百北賦

日本助語辞 全二卷
十論秘説 全三卷
全一卷

- 一發願文
- 一夕歌の歌
- 一菊十歌仙
- 一梅のいづれ
- 一東海道
- 一雞陳二百韻

俳集目録
東花坊撰 一卷
山入 一卷
伯免 一卷
吾仲 一卷
何狂 二卷
蘇守 一卷

- 一七子みづれ
- 一山琴集
- 一八夕暮
- 一四幅對
- 一獅子物狂
- 一淡雪集

里冬 一卷
幽今 二卷
乃露 一卷
東怒 一卷
山隣 二卷
鷺洲 一卷

一本朝八仙	二卷	昇角	一三千化	世蕉翁三十三面忌	四卷	蓮二
一鎌倉海道	二卷	江戸干梅	一鯽俵		二卷	虚白
一糸魚川	一卷	九野	一姫の式		一卷	屯路
一八鳥放生日	芭蕉翁世三卷	野坡	一雪白川		二卷	魯九
一鴨矢立	一卷	鸥笑	一文月往来		一卷	岚枝
一挑首途	三卷	里石	一くひぢすひ		一卷	吳天
一芋刈ら	一卷	一序	一六の花		一卷	以之

寺町通二条下町 書肆 橋屋治兵衛 辰

